



企業編



株式会社  
テオリック

国東町小原2680番地  
設立 平成8年1月 従業員 ▶ 49名

創業者の畠山貞三氏は、もともとは東京で金型の工場を営んでいました。し

かし、円高の影響もあり受注する仕事の数も減り、今後の展望を模索していたとき、テレビ番組で大分県のある企業が超精密な金属加工で躍進している姿を目にしました。平成5年、自分も九州で超精密な金属加工で勝負してみようと決断し、移住してきました。最初は、市内業者の金属加工部門の中で働きました。そこから超精密金属加工を行うようになり、平成8年に独立をしました。現在では、超精密な製品を作るための部品に特化したことと、大分空港を利用して本州の顧客をターゲットにしたことで、平成17年に福島県いわき市に工場を開設するなど事業を拡げる



▲タイ工場創業開始の記念写真

ことができました。そして、今年の4月に、タイの工場が創業開始しました。これは、取引先の生産拠点が海外に移り、現地で工場単位の取引をしたという要望に応えるためでした。国内の仕事の数がここ数年停滞している中、タイ工場からの仕事が入るようになり、テオリックの今後の躍進を担うことが期待されています。テオリックは、「現場を知り、現状を知り、現物を知る。」の3原則を基本に、「お客様に満足してもらおうのは当たり前、お客様に感動してもらえないものづくり」を目指しています。今までは、皆さんが手にしている製品の目に見えない部分に関わってきましたが、今後はテオリックの社名が入った製品を直接消費者に届け、感動してもらうために、今まで培ってきた技術を活かし、医療機器や介護福祉機器の開発に取り組んでいきます。



認定  
農業者編



▲右から2番目が佳光さん、3番目が奥さんの典子さん

岐部 佳光さん  
典子さん

国東町北江  
平成7年からご夫婦で始める。

岐部佳光さんは、園芸の本場「愛知県」の花市場で量販店への卸や仕入れな

どの営業を行っていました。しかし、全国的に見て九州の花卉栽培者は少なく、関東で起こっていた園芸ブームが九州にもやってくるの思いから、40歳を機に退職して、奥さんと二人で花壇苗の栽培をすることにしました。岐部さんが花壇苗を選んだのは、愛知県の花市場のときの同僚や農家の方から「設備投資が少なく、体力は必要だが安定した収入を得られる」と勧められたからでした。岐部さんは、10棟のビニールハウスで1棟毎に管理する種類を変えて、春物のパンジーから秋物のペチュニアまで100種の花を年間35万ポット栽培しています。



岐部さんが心がけているのは、「丈夫で長持ちしてよく育つ苗」にすること。これは、出荷した後に消費者の目に触れるまでには、どうしても時間がかるので、出荷した時よりも1週間後に苗の状態が良くなっているければならないからです。佳光さんは、「自分のところの屋号を『くにさき百花園』としているのですが、これはたくさんのお花を栽培しているという意味もありますが、百貨店でも扱ってもらえるような付加価値のあるものを作りたいたいという思いからです。最近少しづつ取引が始まっており、更に広げて行きたい。典子さんは「20年前お父さんと花の栽培を始めから、子どもと花の世話であったという間に時間が過ぎていきました。これからはお父さんと一緒にずっと続けていきたい」と話しています。



▲車への積込作業

林業・  
水産業編



木村 武文さん  
豊子さん、 渉さん

安岐町下原  
平成17年から親子で始める。

木村武文さんは、父の代から底引き網漁を行ってきました。息子の渉さんは

高校卒業後、会社に勤めていましたが、10年前に漁師になると決意したことから、3代続けて底引き網漁を生業とすることになりました。武文さんも若い頃、建設会社に勤めており、父が体調を崩したことを契機に漁師になったので、息子には無理に漁師になつてほしいとは思っていません。しかし、一緒に漁ができる喜びを日々感じ、自分が父か



ら受け継いだ底引き網漁の技を、4年間一緒に船で過ごす中でしっかりと伝えました。そして、渉さんも4年前に自分の船を持ち、2隻で沖に出るようになった。底引き網漁は、1月から3月の間が甲イカやシリアカイカ、7月から8月頃は赤エビ、8月中旬以降はハモと時期によって獲る種類が変わり、種類が変わると仕掛けも変わるので技術と経験が必要になります。



▲赤エビの選別作業の様子

いつも出荷作業を手伝う豊子さんは、「最近息子が上手になって、お父さんより多く獲るときもあり、頼もしくなってきました。でも、ウチの家計は、やっぱりお父さんの水揚げにかかっちゃうから、まだまだ息子に負けないで欲しい」。渉さんは、「若い漁師仲間と色々漁の仕方などを研修して、試行錯誤して父に追いつく努力していますが、まだまだ経験不足を感じています。父にはいつまでも元気で、一緒に漁場に立ち続けて欲しい」と話していました。武文さんは、「底引き網漁は、時期によっては布団で2・3時間しか寝られない厳しい漁だが、息子ならやってくれる。体が動くうちは一緒にやっていきたい」とやさしい笑顔で話していました。



語っていました。